

龜身齋



藏硯錄



数据加载失败，请稍后重试！



龜泉齋藏硯錄



沙孟海題



技術編輯	美術編輯	責任編輯	裝幀設計	拓片	資料整理	資料說明
毛志明	朱安邦	林國華	陸全根	茅大容	楊浙	汪耀棠

龜阜齋藏硯錄

定價	印刷	發行	出版
九十元	上海市印刷三廠	上海古籍書店 (上海福州路四二四號)	上海書店 (上海福州路四〇一號)

1992年5月第一版 1992年5月第一次印刷
 ISBN7-80569-529-6/J·222
 滬新登119號

《龜阜齋藏硯錄》序

文房四寶實傳播文化之工具，紙墨筆硯四者，惟硯最爲耐久，得以流傳百世，供後人之珍度觀賞及研究也。硯之爲用，由來久矣。漢蘭臺史李尤墨硯銘云：「書契既造，硯墨乃陳。」近年考古發現，足證斯言之可信。我國古代石硯多取天然礫石，隋唐以後又漸以陶泥燒造，而端石、歙石、魯石、洮石等先後發現，皆爲製硯之良材。嘗聞日本產硯之地亦甚多而石質亦甚佳。此不僅兩國書寫用具之相同且皆重視選材與製作者也。

文士硯田筆耕，相親朝夕，昔人稱之爲石友，愛之彌篤，選之愈精。獲一佳品，而雕而琢，錫以嘉名，製銘撰記，以傳後世。千百年來名硯流傳，既美且富。余幼好弄翰，家有傳硯，粗知厓略，而於鑒賞則乏深研，引爲遺憾！然余於題記製銘之品，喜愛尤甚，以其既可見前賢之遺澤，又可知一時之雅故也。嘗見清嘉慶初紀昀（曉嵐）八十一歲時題記之硯，有云：「和菴（盧坤）自廣東巡撫還京，以此硯贈余口：端溪舊石稀若晨星，斯石之佳者，此爲上品矣。竹虛（曹文植）亦言歙石久盡。又何必紛紛相軋乎？」讀此，想見當年師友談藝之樂，並悉兩地產硯之概況。光緒中吳大澂（憲齋）撫粵時亦嘗採端石，琢硯十方，自臨石鼓文，命工精刻，嗣孫湖帆丈示余，得一把玩，惜未乞拓本爲憾，今不知流落何所矣。嘉道間江藩（鄭堂）客羊城佐阮元督幕久，所得館金盡易端溪石硯。歸裝壓擔，暴客疑其挾巨金，尾之兼旬，易舟發篋，乃嗤而去。文人癖好非外人所得而知。此乃藏硯家之異聞也。

中日兩國文化交往，源遠流長，龜阜齋主人蘭錡世家，遐棲高蹈。雅好收藏

中土名硯，積聚日富，研摩所得著爲《邇阜齋藏硯錄》，選其精品百數十事，時代則有宋、元、明、清，地區則端州爲多，次爲歙縣，亦有名家銘刻，可謂大觀。

石硯爲東方所特有之藝術品，歷來藏家以端石爲重，著述流傳，亦詳於端溪。古人云：「得一佳硯，勝於拱璧。」論硯者：一爲論質，二爲論琢，三爲論用，四爲論藏。物聚於所好，真知篤好之士往往夢寐以求之。志一則心專，心專而後能精進。我一生聚書，深知其得來不易之道，聚硯聚書其理則一。主人云：「對於古硯的鑒賞，需要具有對產地、石質、年代等各種各樣的知識。」此誠有得之言也。余謂更有名家製銘題識者，歷時既久，又有真品，有仿製，有作僞，尚須具鑒別考辨之博識。荀子曰：「不登高山，不知天之高也；不臨深溪，不知地之厚也。」我故曰歷代藏硯家於鑒賞之中，已形成其專門之學，若進而蒐集材料，建立系統之硯學，乃當今藏硯家應負之時代使命。

回憶三十年代日本漢學家來北平考察訪問者，余頗獲交游。六十年代余以中國書法家代表團成員訪日，遍識日本書法名家，文酒之會留連兼旬，極一時之盛。八十年代中日聯合舉辦書法討論會及蘭亭書會，又得與日本書家論藝作書相會於杭越，誠乃「群賢畢至，少長咸集」，盛會重聚，令人難忘。今者邇阜齋主人著硯錄成書，屬爲之序，又獲與日本名藏家相神交，大戴記曰：「同聲則異而相應，意合則未見而相親。」此殆同氣相求之義乎？

余維中日兩國人民之間交往日密，文學藝術之賞析亦必增進。主人嗜硯成癖，倘繼硯錄之刊行，編印論著，展覽名硯，提倡硯學研究之風，使東方藝事，發揚光大，主人其有意乎？

一九九〇年二月顧廷龍於北京之北苑時年八十有七

【龜阜齋藏硯錄】序

文房四寶は文化伝播道具にして、筆墨硯紙の四者、惟だ硯のみ久しきに耐え、後人の珍藏、觀賞及び研究に供さるるを得るなり。硯の歴史たるや古く、漢の蘭台史李尤の「墨硯銘」に云く、「書契既に造りて、硯墨乃ち陳し」と。近年考古の發見は斯の言の信ずべきを証するに足る。我国古代の石硯は多く天然の礫岩に取れり。隋唐以後、又漸々と陶泥を以て焼造す。而して、端溪石、歙州石、魯石、洮石等相繼ぎて發見さる。皆製硯の良材たり。我嘗て聞きき、「日本産硯の地亦多くして、質も亦た甚だ佳なり」と。此れ、両国書写用具を同じくするのみならず、皆に硯材と製作者とを重視するの証左なり。

文士は硯田に筆耕し、朝夕相い親しむ。古人之を称して石友と為す。之を愛すれば弥々篤く、之を選べば愈々精し。一佳品を獲れば彫琢し、賜うに嘉名を以てす。銘記を製撰し、以て後世に伝う。千百年來、名硯の流伝既に多し。余、幼くして翰を弄ぶを好む。家に伝硯有り。粗ば概略を知るも、觀賞に於いては深き研鑽を欠くを憾みと為す。然れども題記製銘の品に於いては、喜愛すること尤も甚し。所以は前賢の遺澤を見、一時の雅故を知ればなり。余は嘗て清の嘉慶の初め、紀昀（曉嵐）八十一歳の時、題記せる硯を見たり。「和庵（盧坤）廣東巡撫より京に還り、此の硯を以て余に贈りて曰く、『端硯の舊石稀なること晨星の若し、斯の石の佳なる者、此れ上品なり』と云える有り。竹虛（曹文植）亦た言えり。「歙石久しく尽きたり。又、何ぞ必ずしも紛々として相い軋はんや。」と。此を読むに當時の師友の藝術の樂事を想見し、兩地産硯の概況をしるべきなり。光緒中、吳大澂（客齋）

粵（廣東省）に撫たりし時、亦た端石を採りて、硯十方を琢し、自ら石鼓文を臨し、工に命じて精刻せしむ。嗣孫（吳）湖帆丈、余に示す。一たび把玩するを得るも、惜しむらくは拓本を乞はざりき。以って憾と為す。今、流落何処なるかをしらず。嘉道の間、江藩（鄭堂）羊城に客たりて阮元を佐け幕を督すること久し。得るところの館金（謝金）尽く端硯の石硯に易えたり。帰装の荷の重ければ、暴客、巨金を挾すを疑い、尾行すること兼旬。舟を易える時、篋を発き、嗤いて去る。文人の癖好、外人の得て知るところに非ず。此れ乃ち藏硯家の異聞なり。

中日両国の文化交流は「源遠長流」なり。龜阜齋主人は蘭鐫の世家、避く高踏に棲む。中土の名硯を收藏することを雅好し、積聚し、日に富む。得る所を研摩し、其の精品百数十面を選び、【龜阜齋藏硯録】を著す。時代は則ち宋、元、明、清有り。地区は則ち端州を多と為し、次は歙縣為り。亦た名家の銘刻有りて大觀と謂うべし。石硯は東洋に特有さるるところの芸術品たりて、古来、收藏家は端硯石を以て重しと為せり。著述流伝、亦た端溪石に詳らかなり。古人云く、「一佳硯を得るは拱壁（かかえるほどの大きな壁）に勝る」と。硯を論ずる者、一を質を論ずと為し、二を琢を論ずと為し、三を用を論ず為し、四を藏を論ずと為す。物は好む所に聚る。真に知る、篤好の士は往々夢寐に之を求む。一に志せば則ち心專なり。心專にして後、能く精進す。我、一生書を聚む。得ることの易からざるを深く知る。聚硯も聚書も其の理は則ち一なり。主人云う、「古硯の鑑賞に對しては產地、石質、年代等の各種各様の知識を具有することを要す」と。此れ誠に至言なり。余謂う。「名家の製硯の題識は時を歴ること久し。又、真品有り、倣製有り、偽作有り、須らく鑑別考弁の博識を具うべし」と。荀子曰く、「高山に登らざれば天の高きを知らざるなり。深溪に臨まざれば地の厚きをしらざるなり」と。余は故に歴代の藏硯家は鑑

賞の中において、已に其の専門の学を形成す、と曰へり。更に進んで材料を蒐集し、系統的な硯学を確立するは当今の蔵硯家の使命なり。

三十年代を回顧するに、余は北京を訪問せる日本の漢学者と交流するを得たり。六十年代、余は中国書法家代表団の一員として訪日し、遍ねく日本の書法名家を識り、文酒の会に耽ること兼旬。一時の盛を極む。八十年代に中日連合で書法討論会及び蘭亭書会を開催し、日本書家と藝術を論じ、書作し、杭越に会するを得たり。誠に「群賢畢く至り、少長咸集る」の盛会の再現、人をして忘れ難からしむ。今、亀阜斎主人、硯碌を著して書と成し、之が序を為らんことを属す。又、日本の名蔵硯家神交するを得たり。大戴記に曰く、「同声は則ち導きて相い応ず、意合へば則ち未だ見ずして相い親しむ」と。此れ殆んど同氣相い求むの義なるか。

今後、中日両国人民間の交流は日々密となり、文学藝術の賞析も亦た必ず増進す。主人の硯を嗜むこと癖と成る。尚し硯碌の刊行に繼ぐに論著を編印し、名硯を展覧し、硯学研究の風を提倡せば、東洋藝術をして発揚光大ならしむるなり。主人其れ意有るか。

一九九〇年二月顧廷龍北京の北苑にて時に年八十有七

目録

《龜阜齋藏硯錄》序		
《龜阜齋藏硯錄》序（日文）		
一	錦書硯	1 十八 石筍硯
二	金星伴月硯	2 十九 弁星硯
三	鳳池硯	3 二十 腰腹太史硯
四	仿漢未央宮東閣瓦硯（銅製）	4 二一 蟬硯
五	仿漢未央宮東閣瓦硯（瓦製）	5 二二 從星太史硯
六	葡萄硯	7 二三 古蛙硯
七	梅花硯	9 二四 仿宣和鵝硯
八	玉銓齋硯	11 二五 紫袍玉帶硯
九	五蝠天來硯	13 二六 龍珠硯
十	卧牛硯	16 二七 太史硯
十一	變龍紋硯	16 二八 溪山行旅硯
十二	變龍硯	17 二九 龍池太史硯
十三	變紋淌池硯	18 三十 圓形石渠硯
十四	鳳池硯	19 三一 海濤雲龍硯
十五	鸚桃硯	19 三二 蟬形硯
十六	方池硯	20 三三 橢形硯
十七	變龍門字硯	21 三四 大吉磚硯
		37

三五	夔龍日月硯	38	五七	饕餮壺硯	64
三六	三味齋硯鉢	39	五八	龍珠硯	65
三七	七星太史硯	41	五九	如意池硯	66
三八	梅朵太史硯	42	六十	雲蝠硯	67
三九	雲龍硯	43	六一	雲蝠硯	68
四十	蘭亭硯	45	六二	龜蛇硯	69
四一	蘭亭硯	45	六三	秋瓜硯	70
四二	圭形硯	49	六四	琅嬛館硯	71
四三	雙鳳朝陽硯	50	六五	荷塘清趣硯	72
四四	荷葉硯	51	六六	太極插手硯	73
四五	祥雲星宿硯	52	六七	太史硯	74
四六	瓜瓞硯	53	六八	犀紋硯	75
四七	竹節插手硯	54	六九	荷中君子硯	76
四八	如意池硯	55	七十	龍虎硯	77
四九	青花瓷硯	56	七一	子母獅硯	78
五十	羅漢硯	57	七二	卧鳳硯	79
五一	天然硯	59	七三	太史硯	81
五二	靈芝硯	60	七四	瓦形太史硯	82
五三	大插手硯	61	七五	方池硯	83
五四	五蝠伴月硯	62	七六	雙龍硯	84
五五	卧鹿硯	63	七七	卵石硯	85
五六	橢圓硯	63	七八	井田硯	85

七九	綠瓜硯	87	一百一	海濤旭日硯	118
八十	張廷濟鵝硯	88	一百二	尼山精氣硯	119
八一	生瓷雲龍硯	90	後記		
八二	錦帆硯	91			
八三	狩耳壺形硯	93			
八四	龍馬洛河負圖硯	94			
八五	圭璧硯	96			
八六	罄池硯	97			
八七	鐘硯	98			
八八	仿漢瓦筒硯	100			
八九	高足壺樣硯	101			
九十	江湖滿地硯	102			
九一	蜘蛛硯	103			
九二	黃任古甃硯	104			
九三	插手硯	107			
九四	魚龍仔石硯	108			
九五	盧葵生漆沙硯	109			
九六	龍鳳硯	110			
九七	蟬硯	112			
九八	海狩橢形硯	113			
九九	金心蘭荷葉硯	114			
一百	五星太史硯	115			



一、錦書硯 清代 端溪

長15.5×寬11×厚1.9cm

老坑大西洞優材，石色天青、微帶淡紫，有雨霖牆青花、鵝毛絨青花、玫瑰紫青花、金線、火捺、魚腦碎凍、鵝眼，有量數層，翠綠色，瞳子黃綠。

刻祥雲錦地書卷式，書卷凹處為硯池，清中期製作。



二、金星伴月硯 清代 歙州

長17.2×寬11.3×厚3 cm

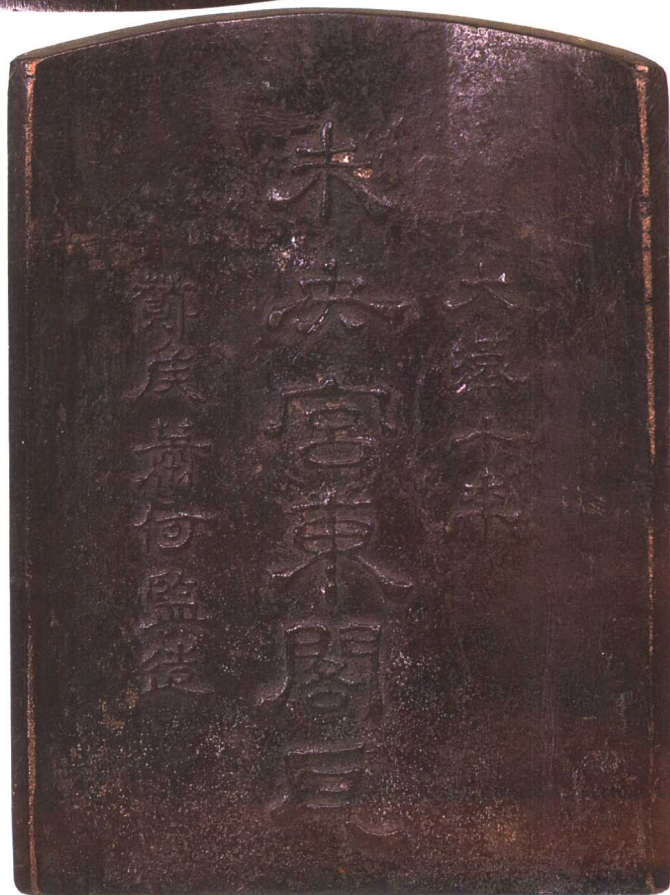
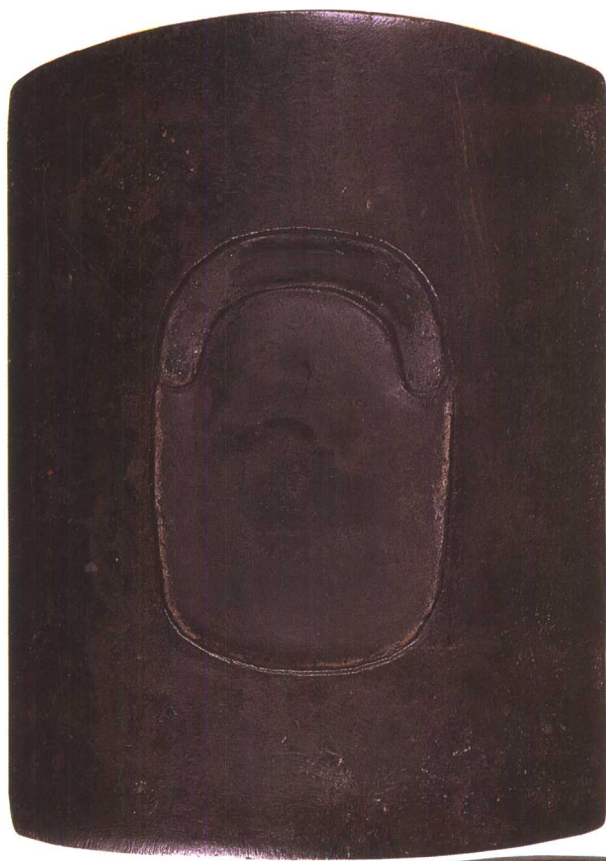
歙州龍尾舊坑石，色青黑，脈理堅勁，細潤如玉。全體金暈、金星，暈如鴻雁、滿天星斗。右下滔滔白紋，湛如秋水，此硯乃龍尾舊坑之良材。以月為池，正反平素，硯側刻銘。



三、鳳池硯 宋代 歙州

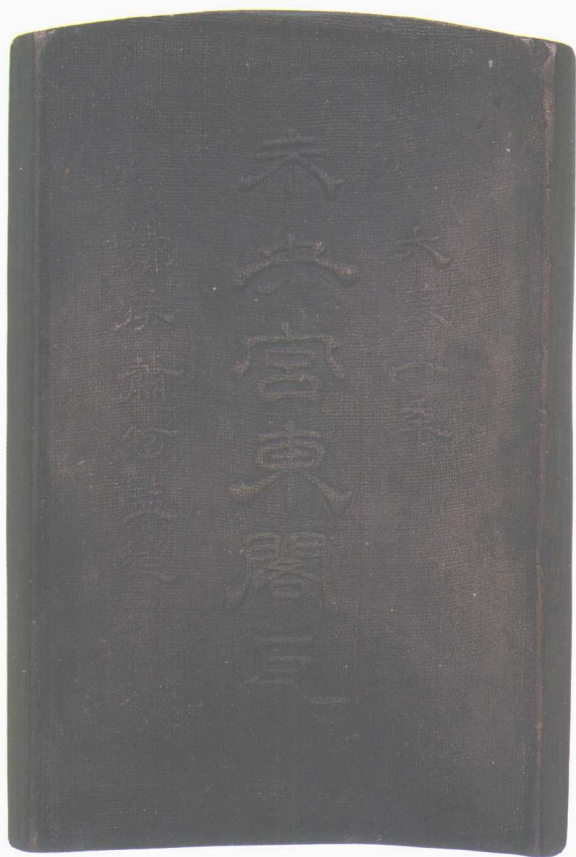
長32.3×寬22.3×厚6 cm

羅紋山舊坑歙石，在南唐及北宋為全盛時期。石色青碧晶瑩，質密細潤，為角浪水波紋。硯落潮處豐滿呈弧狀，池深大，硯堂、墨池、硯緣琢製均具高度技巧，硯底二高足。此硯式由唐代鳳字硯演變而來。



四、仿漢未央宮東閣瓦硯 明代 銅製
長18.7×寬13.4×厚2.5cm

銅硯早在東魏已出現，宋代以後均有鑄造。此硯為明代仿鑄，滿身以褐綠銅銹為衣，製作古樸。



五、仿漢未央宮東閣瓦硯 清代 瓦硯

長25.3×寬16.2×厚2 cm

硯橢圓形，淺凹為受墨處，上印有“曜仙”銘。硯背有“未央宮東閣瓦”六字，左傍有“鄼侯蕭何監造”，右傍有“大漢十年”字樣，俱為隸書陽文。

未央宮是公元前200年蕭何親自監督修成，為西漢王朝最主要的宮殿。